

フランスにおける教材としての楽曲利用

— 「パリの秋」 *Un Automne à Paris* をめぐって —

Utilization of a Musical Piece as a Teaching Material in France

— On *Un Automne à Paris* —

田村 弘行*

Hiroyuki Tamura

2015年のパリ同時多発テロ後に発表された楽曲 *Un automne à Paris* は、フランス国民教育・高等教育・研究省大臣の依頼によって作成され、学校教育で利用されることが推奨されている。本稿では、この楽曲作成に関わった人物の紹介、歌詞の分析、推奨される学校教育現場での利用方法の紹介などを行う。そしてそれらを通して、フランスが国家的危機に直面した際に行ったこの楽曲発表の意味を考える。

キーワード：学校教育教材、シャンソン、移民統合政策、パリ同時多発テロ

I. はじめに

2015年はフランスにとって歴史上もっとも苦難に満ちた年のひとつとなったと言って間違いない。周知のとおり、1月にはシャルリ・エブド社襲撃事件、11月にはパリ同時多発テロ事件が起こり、多くの命が奪われた。特に後者の犠牲者は無差別に襲撃されており、政治やメディアを先導する立場にない一般市民が集う場所が標的とされたことに、住民は一層恐怖と憤りを感じたことは言うまでもない。そして、事件が引き起こしたのは、日常的にテロに遭遇する恐怖感だけではなく、その範囲もパリとその近郊に限られないのではないのかという不安感であろう。「自由・平等・友愛」を国家理念として掲げるフランス国民は、一様に動揺し、共和国の存在意義の揺らぎさえも感じたはずである。国家警察による治安の維持が一定保たれているにも関わらず、オランダ大統領が「フランスは戦争状態にある」¹⁾と言葉にしたことの意味はそこにあると考えられる。

「連帯」はフランス人が好む言葉の一つである。上記の声明で動揺を露呈した国家元首は連帯のための様々な方法を模索していたのであろう。テロ事件から2週間後の国家追悼式典でオランダ大統領は、「彼ら(=テロリスト)に応えるために、我々は、歌を、コンサートを、見せ物の数

*流通科学大学商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

を増やそう。」²⁾と述べている。この発言は、ライブハウス・バタ克蘭でコンサートを聴いていた犠牲者たちへの追悼とともに、テロリストたちが芸術を愛する「自由」を奪おうとすることへの反旗であり、「音楽による連帯」を意味している。それを受けて、現在フランスで活動する歌手ルアーヌ (Louane) が歌う楽曲「パリの秋」*Un automne à Paris* が発表された。この楽曲以外にも多くのものが発表されているが、*Un automne à Paris* の特異性は、フランス国民教育・高等教育・研究省大臣の依頼によって楽曲が作成され、それを学校教育で利用することを推奨していることである。作詞はアカデミー・フランセーズ会員のアミン・マールーフ (Amin MAALOUF)、作曲はその甥であり、映画音楽やアルバム発表で活躍中のイブラヒム・マールーフ (Ibrahim MAALOUF)、そして現代の若い世代の代表者でもあり、広い年齢層から支持を受けるルアーヌ (Louane) が歌唱を担当するこの曲は、襲撃事件の犠牲者への追悼と、パリの街への愛を歌っている。

以下では、歌詞の分析、制作の背景および推奨される学校教育現場での利用方法の紹介を行う。そして、それらを通して、文化大国を自負するフランスが国家的危機に直面した際に行ったこの楽曲発表と教育活動における利用推奨の意味を考えたいと思う。

II. 作詞家・作曲家/演奏家・歌手について

フランス国民教育・高等教育・研究省が立ち上げているポータルサイト *éduscol*³⁾ によれば、*Un automne à Paris* は、パリ同時多発テロ後のフランス全生徒・全学生にむけて象徴的で芸術的な作品の作成を願っていたフランス国民教育・高等教育・研究省大臣ナジャット・ヴァロー＝ベルカセム (Najat VALLAUD-BELKACEM) による依頼で生まれた作品である。*éduscol* 上の教材としての *Un automne à Paris* の指導案⁴⁾ では、まず、この音楽作品を作り上げた作詞家、作曲家、歌手について生徒に調べるよう指導している。以下にそのリンク上のサイトを手掛かりに、作詞家、作曲家、歌手について紹介する。また、次章において、この人選の指導案の意図について述べる。

1. 作詞家 アミン・マールーフ (Amin MAALOUF)⁵⁾

1949年2月25日レバノンで教育家の家庭に生まれる。経済学、社会学を学んだ後、レポーターとして、1974年のエチオピア帝政崩壊、1975年のサイゴン陥落など世界各地の様々な出来事を扱う。母国レバノンの戦争勃発時に、妻子を連れてフランスに向かいジャーナリスト活動を再開した。

1984年から小説、エッセー、オペラの台本などの作家活動を始める。1993年『タニオスの岩 *Le Rocher de Tanios*』で、ゴンクール賞を獲得、1998年『殺戮のアイデンティティー *Les Identités meurtrières*』で、ヨーロッパエッセー賞を受賞し、2010年に彼の全作品にたいしてアストゥリアス公文学賞が与えられた。

2007年から2008年にかけて、欧州委員会の招聘により、多言語に関する意見団体の議長をつとめる。この団体は『有益なる挑戦—如何にして言語の多様性がヨーロッパを強固にするか *Un défi salutaire : comment la multiplicité des langues pourrait consolider l'Europe*』というレポートを刊行している。

ベルギーのルーヴァンカトリック大学、レバノンのベイルートアメリカン大学など、多くの大学で名誉博士号を授与されている。2011年6月23日、アカデミー・フランセーズ会員に選ばれた。

2. 作曲家/作曲家 イブラヒム・マアルーフ (Ibrahim MAALOUF)⁶⁾

レバノン内戦のさなかの1980年、ベイルートで生まれる。12歳の時、祖国を建て直すために建築家になることを夢見るが、この夢は、最終的には、彼が自由の息吹を伝える音楽によってかなえられることになる。

9歳からヨーロッパと中東を行き来していた彼は二つの音楽文化を学ぶ。ひとつは、彼の父、ナシム・マアルーフ (Nassim MAALOUF) が開発した1/4微分音を出すことが可能なトランペットで演奏するアラブの即興芸術の世界、もうひとつはバロック音楽、古典音楽、近代音楽、現代音楽などの西洋音楽の世界である。西洋の音楽で演奏するためのトランペットのテクニックは、まず父から学んでいる。2000年代のはじめに国際的な数々の賞を受賞した彼は、パリのフランス国立高等音楽院の免状も取得している。

彼は活動の場を世界に広げ、ヒップホップ、電子音楽、アフリカ音楽、インド音楽、バルカン音楽、ジャズ、ロック、ポップス、南米音楽と様々なジャンルの音楽を吸収している。こういった様々な音楽や文化との出会いから、フェスティバル、ダンス、映画、オーケストラのための伴奏等の作曲活動に従事している。

2014年には、アルバム『イリュージョン *Illusion*』でワールドミュージックベストアルバム大賞を獲得した。2015年には、ジャリル・レスペール監督の映画『イブ・サン＝ローラン *Yves Saint Laurent*』で音楽を担当し、最優秀オリジナル音楽賞にノミネートされた。

3. 歌手 ルアーヌ Louane⁷⁾

ルアーヌ (Louane) の本名はアンヌ・ペシエール (Anne PEICHERT) で、歌手であり俳優である。1996年11月26日フランスのパ＝ドゥ＝カレ県、エナン＝ポーモンで生まれる。2009年にテレビ局Direct8の音楽オーディション番組「スターの学校 (L'école des stars)」に出場、2013年にはテレビ局TF1の音楽オーディション番組「最も美しい声 (The Voice : la plus belle voix)」のセカンドシーズンに参加し、準優勝した。そこでエリック・ラルティゴ監督の目に留まり、2014年公開の映画『ベリエ家の家族 (日本公開タイトルは「エール」) (La famille Bélier)』の主演に抜擢

され、主人公パウラ・ベリエ役をつとめる。この映画は、主人公パウラ以外のベリエ家の人々は皆耳が聞こえないが、パウラには歌の才能があることを音楽教師に認められ、躊躇しながらも田舎のベリエ家の人々を残してパリに歌の勉強に行く決意をするまでの家族愛と少女の成長を描いた作品である。音楽学校の入学試験で彼女が歌う映画の挿入歌「私は飛び立つ (*Je vole*)」は、もともとミシェル・サルドゥーが1983年に歌ったものが下敷きになっているが、その歌詞が内容と重なり、映画をより印象的なものにし、同映画はフランスで4週連続 No.1 のヒット作となり、2015年セザール賞最優秀新人女優賞、リュミエール賞最優秀新人女優賞を獲得した。歌手としても、2014年にリリースされたシングル「*Je vole*」が広く大衆に受け入れられ、2015年に発表したアルバム『*Chambre 12*』で、さらにその地位を揺るぎないものとした。現在、人気・実力ともにフランスを代表する歌手である。

Ⅲ. 教材としての *Un automne à Paris*

1. 聴取・分析・解釈

ポータルサイト *éduscol* の指導案には、まず聴取・分析・解釈に関する記述があるが、その中で作詞・作曲/演奏・歌唱に関する検索・研究、第一聴取、第二聴取、第三聴取、歌詞に関する分析について述べられている。以下、その記述の順に見ていくことにする。

a. 作詞・作曲/演奏・歌唱に関する検索・研究

指導案には、まず、歌手が必ずしも歌の作者ではないという周知の事実の確認、またこの作品が様々な人の共同作業によるものであるという事実の確認を生徒たちにさせるよう書かれている。次に人の名前から生まれる先入観・偏見について生徒たちに熟考させるように述べている。歌手のルアーヌは若者がよく知るフランス人であるが、作曲家で演奏家であるイブラヒムなどの名前を聞いた時に生徒たちは何を感じるのか。作詞家アミン・マアルーフと作曲家で演奏家であるイブラヒム・マアルーフについて調べることで、人生において人と出会ったことによる影響や文明の多様性を確認し、人々の大部分を作り上げているアイデンティティーの交差についても熟考させるよう導くことが書かれている。

先述したとおり、作詞家アミン・マアルーフも作曲家・演奏家イブラヒム・マアルーフもレバノン出身の移民である。この事実の確認が最も重要な点である。アミン・マアルーフはジャーナリストとして世界各地を見てきた人物であり、フランス語で小説を書き、フランスの文学界において最も名誉あるゴンクール賞を獲得し、さらにはフランスで40名しかその座につくことのできないアカデミー・フランセーズ会員に選ばれている。次章で考察する彼が作詞した歌詞の中には、彼のフランス文化への造詣の深さが見て取れる。その範囲はフランス語、シャンソン、フランス文学、フランス映画、フランスの歴史に及び、歌詞からは、彼のフランス語への愛、パリへの愛、

フランスへの愛が見出せる。イブラヒム・マアルーフはアラブとヨーロッパの二つの異なる文化の音楽教育を受け、彼の音楽活動は世界にその範囲を広げている。この楽曲において、彼の演奏、特にトランペットの 1/4 微分音が奏でるアラブ芸術は、ルアースがフランス語で歌う楽曲と見事に融合している。ここで着目しておきたいことは、母国の文化を大切にしながらもフランス文化をも大切にしている彼らの姿勢は、フランス国家が求める移民のモデルであろうことである。

フランスの移民問題が 2015 年の二つのテロ事件の背後にあることは多くの識者が指摘するところである。特にイスラム文化圏の移民二世・三世がフランス社会に疎外感や不満を感じ、過激派組織の一員としてテロ行為を犯してしまう図式が提示されて久しい。フランス国民教育・高等教育・研究省大臣が彼らにこの楽曲の作成を依頼した意図には、国家がフランスの移民統合政策のモデルとしてふさわしい人物として捉えていたということが考えられるだろう。

b. 第一聴取

第一聴取では、クラスを小さなグループに分け、この歌が引き起こすもののリストをつくる作業を行わせ、次にクラス全体で、感情、最近の事実あるいは過去の事実、音楽、声、楽器に関するものに分類しリストを作り上げる作業をさせる。

この作業は、シャルリー・エブド社襲撃事件、パリ同時多発テロによって感じている生徒たちの不安や様々な思いを吐き出させることによって精神的に彼らを支援する意図があるものと考えられる。

c. 第二聴取

第二聴取では、この歌が引き起こす感情や感動は何であるか、またその感情・感動が生まれる源は、歌詞なのか、音楽なのか、声なのか、器楽編成なのかといった質問を、生徒たちに投げかける。自由な答えが可能であるとされている点は重要だろう。様々な方法で生徒たちの思いを吐き出させること、言葉にさせることが、ここでの主要な意図である。

d. 第三聴取

第三聴取では、この曲を構成する様々な要素を記述し、作詞家、作曲家・演奏家、歌手によって追求された効果を説明する作業を行う。構成要素の例として、声（の意図）、メロディー、歌詞の節の数、一行の音節数、メッセージ、リズム、音楽形式、管弦楽用編曲、詩節に見出せる様々な思想などが挙げられている。ここではフランスの教育において重視される分析的な思考方法が実によく表れている。またフランスの国語教育において特徴的な伝統的詩法の学習への配慮も感じられる。

具体例としては、まず独唱の声であり、ゆっくりとした流れの中で明瞭に発音された女性の声

であること。次に澄み切った声で、はっきりと明瞭な言葉で歌唱することで、歌詞の内容、すなわちメッセージの重要性が導かれていること、たとえことばがわからなくとも追悼の意図は感じられるであろうことなど、いくつか挙げられている。歌詞の分析に関しては、次項で述べることとする。

e. 歌詞に関する分析

指導案では、フランス語・フランス文学、音楽、歴史、モラル・市民教育、美術などを担当する様々な教師が、この作品を使って学際的に教育する可能性を述べている。以下、詩節ごとに原詩と対訳（著者による）を挙げながら、指導案を参考にして分析していく。フランス語・フランス文学の観点から見ると、この歌詞は4行詩（quatrain）21詩節（couplet）から構成されている。一つの詩節は7音節詩句（heptasyllabe）3行と次に続く4音節詩句（tétrasyllabe）1行から構成されている。

第1詩節

A l'amie qui est tombée,	倒れた友に
Une chanson sur les lèvres,	唇に歌を
Ensemble nous chanterons,	ともに我々は歌っていく
Main dans la main	手に手をとって

第2詩節

Pour tous ceux qui sont tombés,	倒れたすべての者たちのため
Pour tous ceux qui ont pleuré,	涙したすべての者たちのために
Ensemble nous resterons,	ともに我々はとどまる
Main dans la main.	手に手をとって

第1詩節は第6詩節、第14詩節、第18詩節で繰り返され、第2詩節は第10詩節、第19詩節で繰り返されている。二つの詩節に共通する歌詞「ともに(ensemble)」「手に手をとって(Main dans la main)」によってフランス国民が好む生活信条である「連帯」の精神が強調され、この歌の基調をなしている。

指導案が指摘しているように、この作品の歌詞は、伝統的シャンソン、映画などの作品および歴史的事実との関連性を見出すことができる興味深いものである。「手に手をとって(Main dans la main)」は、クリストフ(Christophe)が1965年に発表したシャンソン『Main dans la main』を想起させると指導案は指摘している。

第3詩節

Pour Paris, ses quais, sa brume,	パリのため、その岸、その霧のため
La plage sous ses pavés,	敷石の下の砂浜
La brise qui fait danser	そよ風が躍らせる
Ses feuilles mortes.	その枯葉たち

第4詩節

Paris, ses flâneurs, ses ombres,	パリ、そこで散歩する人々、その影たち
Ses amoureux qui roucoulent,	甘い言葉をささやくその恋人たち
Ses bancs publics, ses platanes,	そのベンチたち、そのプラタナス
Ses feuilles mortes	その枯葉たち

第5詩節

Paris qui s'éveille à l'aube,	夜明けに目覚めるパリ
Deux cafés noirs en terrasse,	テラスのカフェ2つ
Un jardinier qui moissonne	庭師はかき集める
Ses feuilles mortes.	その枯葉たち

第3詩節冒頭の「パリのために (Pour Paris)」は、第2詩節の「ともに我々とはどまる (Ensemble nous resterons)」に続く歌詞であり、「倒れたすべての者たちのため、涙したすべての者たちのために (Pour tous ceux qui sont tombés, Pour tous ceux qui ont pleuré)」と呼応している。第3詩節から第5詩節においてパリは擬人化され、「その＝パリの」という意味で繰り返される所有形容詞“ses, sa”を伴いながら、パリに付随し想起される事物・人・光景が描かれている。それは作詞家アミンのパリ、人々が生きているパリ、さらには犠牲者たちが生きていたパリの鎮魂歌となっている。4行目に共通する「その枯葉たち (ses feuilles mortes)」は犠牲者たちの隠喩とも解釈できるであろう。

指導案を参照するまでもなく、「枯葉 (feuilles mortes)」はジャック・プレヴェール (Jacques Prévert) の詩、イブ・モンタン (Yves Montand) らが歌ったシャンソンを想起させる。また、“quais” “brume”からはジャック・プレヴェール脚本、マルセル・カルネ監督の映画『霧の波止場 (Le quai des brumes)』を思い起こすこともできる。「敷石の下の砂浜 (La plage sous ses pavés)」⁸⁾は68年の5月革命のスローガンとして有名である。学生運動で投石を作るためやバリケードを作るために敷石をはがした下に現れた砂に限りない自由を感じたのである。「甘い言葉をささやくその恋人たち、そのベンチたち (Ses amoureux qui roucoulent, Ses bancs publics)」からはジョルジュ・ブラッサンスのシャンソン『ベンチの恋人たち (Les amoureux des bancs public)』、「目覚めるパリ (Paris qui s'éveille)」からは、ジャック・デュトロンのシャンソン『5時、パリは目覚める (Il est cinq heures, Paris

s'éveille)』が想起されると指導案は指摘している。

このように、歌詞の中にフランスの、特にパリを歌った過去の代表的なシャンソン、映画のタイトル、歴史的な言葉が歌詞の中にちりばめられている。パリからイメージされる事物・人・光景を表す言葉は、連綿と続くフランスの伝統、芸術、思想をまとい、その「パリのために (Pour Paris)」 「ともに我々とはどまる」と続くのである。ここで、この歌詞を作ったレバノン出身の作家アミン・マアルーフがいかにフランスの芸術、歴史に造詣が深いかということを確認しておきたい。第6詩節は、前述したとおり、第1詩節同様「倒れた友に / 唇に歌を / ともに我々は歌っていく / 手に手をとって」が繰り返される。

第7詩節

A ceux qui se sont battus	パリが自由であるために
Pour que Paris reste libre,	パリがパリのままであるために
Que Paris reste Paris,	戦った者たちへ
La tête haute.	顔をあげて堂々と

第8詩節

Aux hommes qui sont venus	世界の隅々から
Des quatre coins de la terre,	生きる唯一の希望をもって
Dans l'unique espoir de vivre	やってきた男たちに
La tête haute.	顔をあげて堂々と

第9詩節

Aux femmes qui ont subi,	勇気を持って持ち続けたがために
Humiliations et violences,	屈辱と暴力を
Pour avoir osé garder	受けた女たちに
La tête haute.	顔をあげて堂々と

指導案の中で、音楽面では第7詩節の「パリがパリのままであるために (que Paris reste Paris)」がモーリス・シュパリエ (Maurice Chevalier) のシャンソン『パリはずっとパリのままであるだろう (Paris sera toujours Paris)』を思い起こさせるとの指摘がある。『Paris sera toujours Paris』は現在若者に人気のあるザーズ (ZAZ) によって歌われ若者も耳にし、口ずさむ曲である。また、歴史教育、モラル・市民教育の面からは、第8詩節には第二次世界大戦で男性が払った犠牲、第9詩節には長年の虐げられた時代における女性の人権、それぞれへの敬意が示唆されている。

現在フランスが、2015年の二つの事件後、危ういながらも手にしている自由が、第二次世界大戦時ドイツ支配下での困難な状況から多くの犠牲を出しながら勝ち得たものであることを生徒に

知ってほしいという願望が歌詞の中に表現されている。第9詩節は、広義の女性解放運動にふれていると思われるが、今日のイスラム社会の女性たちがおかれている状況への問題意識も見出すことができよう。

第10詩節は、第2詩節「倒れたすべての者たちのため / 涙したすべての者たちのために / ともに我々とはどまる / 手に手をとって」が繰り返される。

第11詩節

Nous reprendrons les accents	我々が取り戻すのは調べ
Des aînés qui ne sont plus.	もはやいない先人たちの
Leurs mots au milieu des nôtres,	彼らの言葉を我々の言葉の中に
Nous chanterons.	我々は歌っていく

第12詩節

"J'ai deux amours", "Douce France",	「私には二つの愛」、「優しきフランス」
"Non, je ne regrette rien",	「いいえ、私は何も後悔しない」
"Ami, entends-tu", "Paname" -	「友よ、聞いているか」「パナム」
Nous chanterons.	我々は歌っていく

第13詩節

Dans la langue de Racine,	ラシーヌの言語で
De Senghor, d'Apollinaire,	サンゴールの、アポリネールの
De Proust, de Kateb Yacine,	ブルーストの、カテブ・ヤシーヌの（言語で）
Nous chanterons.	我々は歌っていく

指導案においては、第12詩節に古典的なシャンソンのタイトルが列挙されていることが指摘されており、第13詩節に挙げられている作家たちの時代、文学ジャンル、文体などを生徒たちに調べさせることが推奨されている。

第11詩節から第13詩節の中には、同一の詩句「我々は歌っていく（Nous chanterons）」が見られる。その歌は、第13詩節にあるように、先人たちが鍛え上げてきたフランス語によって歌われるのである。フランス共和国憲法第1章第2条には「共和国の言語はフランス語である」⁹⁾といった日本の憲法には見受けられない一文が明記され、国を規定するフランス語の重要性が記されている。多くの移民を抱え悩むフランスは、移民政策として現在統合政策を取っているが、フランスのアイデンティティーを維持するために、移民にフランス語能力を身に着けることを要求している¹⁰⁾。

この歌詞を書いたのは、レバノン出身の移民でありながら十分なフランス語能力を身につけた

作家である。そして、歌詞には、伝統的なシャンソン、文化や歴史への言及、偉大な作家を生んだフランス語への敬意、それらを共有していきたいという彼の思いが見出せる。それは、フランス人と同様に移民の子弟にもフランスの伝統・文化そして言語を学んでほしいという国民教育・高等教育・研究省や政府の願望に一致するものであろう。それが、テロ事件後の人心を慰め、連帯の精神を鼓舞する歌詞の内容に加えて、この楽曲を学校教育に利用することを推奨した理由の一つだと考えられる。

第 14 詩節は第 1 詩節「倒れた友に / 唇に歌を / とともに我々は歌っていく / 手に手をとって」の繰り返しである。

第 15 詩節

A vous tous qui gardez foi	世界のあらゆる国で
En la dignité de l'homme,	人間の尊厳を
Dans tous les pays du monde,	信じ保つあなた達みんなに
Et pour toujours.	そして永遠に

第 16 詩節

L'avenir vous appartient,	未来はあなた達のもの
Il vous donnera raison,	未来はあなた達に理由を与えるだろう
Il sera à votre image,	未来はあなた達のイメージのものとなるだろう
Et pour toujours.	そして永遠に

第 17 詩節

Vous pourrez voir refluer	あなた達は引き返すのを見ることができるだろう
Le fanatisme, la haine,	狂信が、憎悪が
L'aveuglement, l'ignorance,	盲目が、無知が
Et pour toujours.	そして永遠に

指導案では、第 15 詩節の歌詞と関連して 1948 年に第 3 回国際連合総会で採択された世界人権宣言を生徒たちに参照させるように書かれている。また、第 17 詩節に関しては 1986 年にノーベル平和賞を授与されたエリ・ウィーゼル (Elie Wiesel) の言葉「狂信は盲目で、人の耳や目も不自由にします。(…)狂信家は自分に問いかけもせず、懐疑を知りません。自分は知っている、知っていると思っているのです。」¹¹⁾ の参照を促している。

第 11 詩節から第 13 詩節までは、人称代名詞「私たち (nous)」が主語となり、詩人と一体化して「歌っていく」と表現されていたが、第 15 詩節から第 17 詩節にかけては、人称代名詞「あなた達 (vous)」が主語となり、「未来はあなた達のもの (L'avenir vous appartient)」という表現から

わかるように、詩人よりも若い世代にたいして未来を託す表現がなされている。第 16 詩節の “raison” は、存在理由＝レゾンデートル “raison d’être” の “raison” と同様にデカルトのいう万人に平等に与えられた「理性」とも解釈しうるだろう。

第 18 詩節は第 1 詩節「倒れた友に / 唇に歌を / とともに我々は歌っていく / 手に手をとって」、第 19 詩節は第 2 詩節「倒れたすべての者たちのため / 涙したすべての者たちのために / とともに我々はとどまる / 手に手をとって」が繰り返される。

第 20 詩節

Que jamais plus la terreur	もう決して恐怖が
Ne vienne souiller nos villes,	我々の町々を汚しに来ないように
Ni jamais jamais la haine	決して決して憎悪が
Souiller nos cœurs.	我々の心を汚しに来ないように

第 21 詩節

Que la musique demeure,	音楽がとどまりますように
Dans nos rues comme en nos âmes,	我々の魂にあるように我々の路に
Pour toujours un témoignage	永遠に
De liberté.	自由の証として

第 20 詩節は Que で始められ動詞が接続法で書かれる祈願文である。「決して決して憎悪が / 我々の心を汚しに来ないように」で思い起こされるのは、パリ同時多発テロで妻を亡くしたジャーナリストのアントワヌ・レリス氏がテロリストに向けてつづり、多くの人の涙を誘うとともにテロリストへの確固たる抵抗の姿勢を改めて考えさせたフェイスブック上の文章¹²⁾ だろう。「君たちは私の憎悪を手にはしない。」“Vous n’aurez pas ma haine.” と題された彼の文章の中で、彼は「怒りによって憎悪に応えることは君たちをそのようにしている無知そのものに屈することになるだろう」と書いている。憎悪が憎悪を生む悪循環を打ち切る思いが作詞家の思いと一致している。

第 21 詩節も同様の文型で構成され祈願の形で表現されている。「音楽 (la musique)」がとどまっしてほしい。その「音楽」は「自由の証 (un témoignage De liberté)」と同格であり、その「自由の証」が「永遠に (Pour toujours)」とどまることを祈願しているのである。

2. ワークショップ

前節では、教材としての *Un automne à Paris* を聴取・分析・解釈の面から見てきたが、本節では指導案のクラスにおけるワークショップを見ていく。この活動は「社会参加型シャンソン

(chanson engagée)」の作詞・歌唱と作品に書かれた思想に関して話す・書く活動が述べられている。

a. 社会参加型シャンソンの作詞と歌唱

指導案は、まず一人あるいはグループで一つの詩節あるいは二つの詩節を作詞し、éduscol ホームページからダウンロードした演奏にあわせて歌うことを提案している。「パリのために」で始まる第3詩節において、パリがイメージさせるものが描かれていたが、生徒にとってパリが喚起させるものが何かを尋ねる。パリに関する絵画や写真をヒントに歌詞を書かせるなどの可能性が述べられている。

並行して、パリが喚起させたものがどのような危険にさらされているのか尋ねて歌詞を書かせる、その危険に対する対応策（喜び、友情など）を考えさせ作詞させる提案がなされている。第20詩節、第21詩節の“Que”＋接続法の表現を使用し、願望内容を作詞する提案が述べられている。

Ⅲ章1節b項の第1視聴およびc項の第2視聴の活動とともに、この生産活動においても、生徒たちの心の中にあるパリへの愛や不安など様々な思いを言葉にすることで、生徒たちの精神的なストレスを軽減し、また危険への対応として何が考えられるかを考えさせることにより、生徒たちをポジティブな方向へ導こうとする国民教育・高等教育・研究省の意図を見出すことができる。

b. 作品に書かれた思想に関して話す・書く活動

聞き、理解し、歌われたこの曲は襲撃の記憶と犠牲者への追悼の重要性を表明する機会であり、フランスの標語「自由、平等、友愛」を示す守られるべき諸観念を表明する機会なのでと指導案は述べており、生徒たちが様々な表現形式で表明する可能性を挙げている。

- ・ 記事、中学のブログの音楽欄、雑誌、サイトなど
- ・ 解釈的討論会
- ・ 思い思いの形式で別のテキスト
- ・ 造形作品、デッサン、ポスター、献呈の辞
- ・ 落書き、写真モンタージュ、ビデオクリップ、歌とともにイラストのスライドショー

この活動は、教材としての *Un automne à Paris* の詩という形式から離れ、様々な形式に、その創作範囲を広げるものとなりうる。生徒たちが自らの思いを様々な作品に展開し、とりわけ言葉を発し表現する行為によって、生徒たちの精神を安定させる国民教育・高等教育・研究省の意図、またフランスの標榜する諸価値を生徒たちに確認させようとする意図を見出すことができる。

IV. おわりに

以上、フランス同時多発テロ後に、悲しみにくれた国民の心を癒し、彼らの愛国心を支えるために制作された *Un automne à Paris* の学校教育の場での教材としての利用方法を紹介した。

国家的危機に音楽を利用することを、文化大国フランスの矜持たるや、と称賛して終わるのは容易い。また、これを若い人気歌手が歌う楽曲の力を借りた、大衆向けの国の安直な対応と考えることも安直にすぎる。それは、そこで推奨されている方法が、本稿で確認したとおり、17世紀に言語による国家統一を目指す意図でフランス学士院が創設されて以来の詩法が活かされていること、また高等教育への合格基準に至るまで重視される分析的な思考方法の教育が見られることなどによって、裏付けられる。これは、この楽曲の教育現場での利用に関する考察として重要な視点である。しかし、考察の中で何度か言及し着目してきた、この楽曲の教材利用の背景に透けて見える国家の意図を考慮に入れることを忘れてはならない。それは、移民たちのフランスへの統合策である。ここには、文化大国フランスが、国民に、さらには世界に示したテロへの抵抗の方法の一面を見て取れるだろう。

というのは、これがテロ行為への報復としてその後即時再開されたオランダ大統領指揮によるシリア空爆と対極的な位置にあると言えるからである。本文中で引用したレリス氏の姿勢にもあるように、憎しみによる報復ではなく、寛容や受容を示すことでの対応として評価することができよう。

そこに国のどのような策略があったかは容易に断定できずとも、結果としてそのような効果を生んだであろうことは推察しうるし、またそうであることを願いたい。

引用文献、注

- 1) ロイター「オランダ大統領『フランスは戦争状態』、非常事態 3 カ月延長へ」2015 年 11 月 17 日記事
[<http://jp.reuters.com/article/france-shooting-idJPKCN0T52FU20151117>] (最終検索日: 2016 年 4 月 3 日)
- 2) Slate FR: Hommage national: le texte intégral du discours de François Hollande, le 27 novembre 2015
[<http://www.slate.fr/story/110717/hommage-national-texte-discours-francois-hollande>]
(最終検索日: 2016 年 4 月 3 日)
- 3) éducol Portail national des professionnels de l'éducation : Ressources-commemoration-des-attentats-de-2015
[<http://eduscol.education.fr/cid97065/commemoration-des-attentats-de-2015.html>]
(最終検索日: 2016 年 4 月 3 日)
- 4) éducol Portail national des professionnels de l'éducation : Pistes de travail pour une étude du texte au collège
[http://cache.media.eduscol.education.fr/file/Actu_2015/41/1/Synthese_utilisation_pedagogique_UN_AUTOMNE_A_PARIS_v2_520411.pdf] (最終検索日: 2016 年 4 月 3 日)
II 章、III 章においては、この指導案を紹介し、参照しながら考察する。
- 5) Académie française : Amin MAALOUF
[<http://eduscol.education.fr/cid97065/commemoration-des-attentats-de-2015.html>]

- (最終検索日：2016年4月3日)
- 6) IBRAHIM MAALOUF : BIBLIOGRAPHIE [<http://www.ibrahimaalouf.com/biographie/>]
(最終検索日：2016年4月3日)
- 7) François Alquier, *Louane, aujourd'hui l'avenir*, Éditions Du Moment (2016) , 174p.
- 8) Maurice Meuleau, *L'histoire de France en 100 mots célèbres*, Armand Colin (2010) , p. 201.
- 9) CONSEIL CONSTITUTIONNEL : Title premier – DE LA SOUVERAINNETÉ ARTICLE 2.
[<http://www.conseil-constitutionnel.fr/conseil-constitutionnel/francais/la-constitution/la-constitution-du-4-octobre-1958/texte-integral-de-la-constitution-du-4-octobre-1958-en-vigueur.5074.html#titre1>]
(最終検索日：2016年4月3日)
- 10) フランスにおける移民統合政策とフランス語教育については、下記の論文を参考にした。
西山教行：「共和国統合をめざす受入れ統合契約と移民へのフランス語教育の制度化について」,
『言語政策』第6号(2010) pp. 125-137.
- 11) François Mitterand et Elie Wiesel, *Mémoire à deux voix* , éditions Odile Jacob (1995) , pp.65-66.
フランスワ・ミッテラン/エリ・ウィーゼル(平野 新介 訳)『ある回想 大統領の深淵』朝日新聞社
(1995) ,pp.55-56.
- 12) Antoine Leiris Facebook : *Vous n'aurez pas ma haine*.
[<https://www.facebook.com/antoine.leiris/posts/10154457849999947>] (最終検索日：2016年4月3日)